

■研究十二月往来〈41〉

〈恋重荷〉、〈文荷〉、〈枕物狂〉

―山科莊司、狂言の重荷再発見―

田口和夫

老人への難題〈綾鼓〉〈恋重荷〉

「研究十二月往来」(『41』)に載せられた松岡心平氏の論「恋重荷」「綾鼓」の老人の身分は両曲のシテが掃除を職掌とする散所者であったことを、歴史学関係の諸論を引いて確認され、示唆されること大であった。驥尾に付して、その広がりを考えてみたい。

〈綾鼓〉〈恋重荷〉とも、卑賤な老人が高貴な内裏女御に恋する、という設定では共通しているが、課せられる難題が異なる。〈綾鼓〉では「綾で張った鼓」を鳴らす。〈恋重荷〉では「綾羅錦紗で包んだ岩」を持ち歩くことである。話型から云えば、これは昔話の「難題智」に当たる設定である。鼓を難題とした点で云えば、〈綾鼓〉は昔話にみえる「打たぬに鳴る太鼓」の裏返しの設定である。〈恋重荷〉の、恋を成就させるために岩を持ち上げるといふ発想は、「重撃石」の伝説に近い。この石を持

ち上げられれば、想いが遂げられるというものである。それを用いた狂言(石神は、夫と別れたい妻が石神に願いを掛け、夫に添えなれば上がれと言つて、持ち上げると上がる、という設定になる。〈恋重荷〉の方は話型通りの難題であった。

山科莊司「掃除」

松岡氏は、〈恋重荷〉の、白河の院における「菊の世話係」であるシテは「散所者であるはず」としながら、「山科莊司」という「一般人として設定されていることが不審」とされている。確かに「莊司」は莊園の管理者と解される語であり、言葉通りなら散所民身分の者とは云えないからである。私は、「山科莊司」は本来「山科掃除」と表記されるべき語であったと解したい。「莊司しやうじ」と「掃除さうじ」は同音ではない。「莊」「掃」は開音で通用するが、「じ・ぢ」は別音だからである。それでも、

本来は「掃除」であつて、それが似た発音である「莊司」に取りなされたのだと考える。

山科の掃除散所の歴史は古く、川島將生氏の「山科散所」(『散所・声聞師・舞々の研究』思文閣、平16)によれば、「中右記」元永二年(1194)五月の記事から、「山科散所は白河新御所の庭払に従事している」事が知られる。白河院の時代である。これを山科散所の側から云えば、天皇家の御所に掃除散所として奉仕する權益を得たという事になる。被差別民が持つ權益が、天皇家・権門・社寺から付与されたものという權威付けは、中世に数多く見られる。山科散所はその事実を主張し続けていた筈である。また、掃除散所の者の職掌は「庭掃」以外にもあつた。世阿弥の時代、「看聞日記」に見える「内裏庭掃除」に採用された散所民「市」のことは、松岡氏も引かれているが、九月重陽の節句に用いられる九月八日の「菊献上」も行っていた。「山科掃除」の老人も、「市」と同じ職掌、掃除散所の一人として九月の一日だけ菊を植えて来たいたのである。この山科散所の歴史を、同じ被差別民である猿楽の役者世阿弥は知っていたのではなにか。「庭掃きの老人」を「山科掃除散所」の者と限定したのは、白河院との縁による。「掃除」役を、天皇の菊愛好による世話係に格上げし、「掃除」を止めて「莊司」と呼ぶことにしたのは、散所民が女御を痛めつけると解されるのを嫌

って、やや身分がありそうな「山科莊司」という一般人だったのであろう。松岡氏は、散所民を「前面に出したくなかった世阿弥なりの韜晦」とされているが、私解も同じになった。

狂言〈文荷〉・〈枕物狂〉―重荷の再発見

狂言〈文荷〉において、太郎・次郎の両冠者が主人の恋文を竹杖で担って行く場面で、〈重荷〉の一節「しめじが腹立ちや」（茂山は「重くとも」から）を謡うのは良く知られている。〈文荷〉の古型は天正狂言本の〈文さき〉である。適当に漢字を宛てて引く。

一、大明出て人を呼び出し、花子の許へ文をやる。独りは行くまひと言ふ。二人やる。

道にて、我持て人持てと論ずる。竹に結ひ付けて担ふ。後は引き裂いて持つ。のちは風の便りにやるとて、煽ぎやる。帰りて斯くと言ふ。主腹立ちて追走らかず。

ここには〈恋重荷〉の謡が記されていない。天正狂言本の基本的な記述方法は、語りや謡い物は落とさず記す、であった。謡っていない物は落として記す、であった。謡っていない物と理解されるのである。ところが、「竹に結び付けて担ふ」形は、〈恋重荷〉における、重荷を棒に依って担うという古演出に学んだものと解されており（橋本朝生氏『狂言の形成と展開』、私もそう考えていた）。

改めて考えてみると、形があるのに、伴う

べき謡いが無いというのは、どうも落ち着かない。演技上の要点である「二人で担う」ということに注目すれば、これは、一人で担おうとする能〈恋重荷〉とは関係なしに、「重い恋文」だという事を強調しようとして、二人で担うことにしたのではないかと思えて来た。そう考えると〈文さき〉の段階では作者の意識には〈恋重荷〉は無かった事になる。そして、次の時代の狂言役者が「閑吟集」七〇番歌「しめじが腹たちや・・」に見える「恋・重荷」に気付いて、これを担う時の歌に取り込んだ。江戸初期以降の〈文荷〉はこのようにして、二段階を経て成立したと考えられる。その後、江戸中期以降、〈恋重荷〉が四座一流で演じられるようになったとき、〈文荷〉は〈恋重荷〉のパロディとして再発見されることになったと云えよう。

狂言〈枕物狂〉についても触れておこう。天正狂言本では〈恋のおふぢ（祖父）〉の名で収められ、恋のために物狂いとなった祖父が登場して「枕」にちなむ小歌を謡い続け、後に〈松風〉と〈百万〉から取った謡いを謡う。〈恋の祖父〉キリ部分の能〈百万〉のもじり、「よくよく物を案ずるに・・」は〈枕物狂〉に無いが、代わりに〈百万〉の「とくにも名乗り給ひたらば・・」が入る。そして〈恋の祖父〉に無いのは、現行では重要な部分となっている語り「志賀寺の上人の恋物語」と、それに続く小歌「恋や

恋、我中空になすな恋、恋風が来ては袂にかい纏れての、袖の重さよ、恋風は重ひものかな（の）」（虎明本・天理本）である。この小歌は〈恋重荷〉において、老人が死んだ後の、ツレ女御の謡う「恋よ恋、われ中空になすな恋」と「閑吟集」七二番に見える小歌「恋風が・・」とを取り合わせたものである。

確認したいのは〈恋の祖父〉には、恋の小歌の外に、祖父が恋する乙御前に逢う時の謡いとして、能松風と能百万の謡いを用い、さながら能のパロディづくしになっていったということである。そこに近世初期台本では、語りとともに新しく〈恋重荷〉も加わった事になる。こうして、祖父に〈恋重荷〉の老人のイメージが重なったとき、〈枕物狂〉の祖父が持つ「ささにまくらを結びつけ」（虎明本）の所持物が問題になる。軽々と祖父が担っていたのは、能の物狂いが持つ「狂い笹」であった。シデの代わりに小さな枕を付ける。この枕は古代裂の様な美しい布で包まれている。綾羅錦紗で包んだ岩を美しい布で包んだ枕とし、棒を笹として担ぐ、この様に言い換えると、普通の狂い笹が、「恋よ恋」一句の謡によって、恋の重荷のパロディとなったことが分かる。それまで、〈枕物狂〉に重層していた能の世界に加えて、〈恋重荷〉もここで参画したことになるのである。

（文教大学名誉教授）